

きるからです。

本年度も引き続き、「広報たてしな」及び「立科有線放送」を通して、毎月、ささやかな体験と、ささやかとは到底言えない反省や後悔に基づいた提言をさせていただきます。ご自身の心のフィルターで濾過され、ご自身の養育及び教育実践に少しでも生かしていただければ、幸いです。ご意見やご要望がございましたら、ご遠慮なくお寄せください。

なお、「広報たてしな」は、立科町のホームページでもご覧になれますので、ご利用いただきたいと存じます。



10数年前、ある脳科学者が、脳の成長に関するPTA講演会で、「学校は、そのシステムが機能すれば、人類最大の発明の一つと言えよう。学校では、子どもたちが、多くの人との交わりを通して、人文科学から社会科学、自然科学、芸術、体育まで、系統的に学習したり、体験したりすることができ、言語や思考、記憶、感情のコントロールなどの働きをつかさどる前頭前野をバランスよく鍛え、成長させるからだ。」と述べました。

明治5年の学制布告及び明治12年の教育令、明治19年の学校令等によって、義



務教育が全国的に行われるようになってからずっと、学校は、火や水の利用、道具、文字、時間、度量衡、電気などの発明と並び、学校が人類最大の発明の一つであるための前提条件（「学校が機能していれば……」）に対する数多の批判を浴びてきた歴史があります。

**知育偏重。**教師先導の詰め込み教育。時の政府に追従する教育。経済最優先の論理に基づいた人材育成教育。目に余る閉鎖性。

さらに、スウェーデンの教育学者、エレン・ケイ（1849～1926）の、「近代の学校は、知識に対する渴望や自力で行動する能力、天賦の観察力など、

子どもが学校に行くに当たって、それぞれが身に付けていた性質を隠してしまおう。」という指摘は、そっくりそのまま日本の学校に当てはまる……。〔広島大学教授柴谷久雄〕

さらにまた、「教育とは、時代が其一切の所有を提供して次の時代の為にする犠牲だ。」と説いた歌人、石川啄木（1855～1912）は、「日本の教育は凡人製造を以て目的とし、天才の個性を伸ばそうとしない。」とも指摘した……。

中学校に勤務していたときは、これらの批判や指摘には確かに首肯せざるを得ない面があると認めながらも、その何倍もの憤りや疑問を感じていました。特に若いころは腹立たしく、寅さんから、それを言っちゃあ、お仕舞いよ、と啖呵を切られそうな、「そんなに仰るなら、あなたがやってみなされ。」という捨て台詞を一人つぶやくこともありました。

このような、おびただしい学校批判の中で最も衝撃的だったのが、昭和58年に刊行された「思考の整理学」（外山滋比古著）の中の、「次の「説」（要約）です。

「人間には、グライダー能力と飛行機能力がある。受動的に知識を得るのが前者。自分で物事を発明・発見するのが後者で、新しい文化の創造には飛行機能力が不可欠である。グライダーが優雅に滑

空するさまは美しいが、悲しいかな、自力で飛ぶことができない。だが、学校はグライダー人間の訓練所で、エンジンを搭載した飛行機人間はつくらない。学校では、ひっぱられるままに、どこへでもついて行く従順さが尊重され、学校教育を受けた期間が長ければ長いほど、自力飛行の能力は低下する。」

現在、この本は、「東大生が読んでいる本」の第一位とのことですが、「最も優秀なグライダー人間」と目された（？）東大生の反応が気になるところで。

この「学校教育グライダー人間訓練所説」（？）から30数年経過した今、学校は、児童・生徒一人一人の「生きる力」を育むために、知徳体の調和を重んじ、知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力・自ら学ぶ力、そして、豊かな心を育てる教育に大きく舵を切っています。

学校教育を貫く棒の如きものは不変不動で、学校教育への希望や期待には依然として大きいものがあります。さらに、不登校やいじめ、スマホの問題も深刻な状況にありますので、学校に集うすべての方が、舵の方向をしっかりと見定め、学校のシステムがよりいっそう機能するために尽力されることを期待しています。「そんなに仰るなら、あなたがやってみなされ。」と言われるよう……。